

# われに 望郷の念なし



藤田 松吉氏



伊波 廣泰氏

タイの大地に  
生きた

元日本兵

最近、いろいろな経緯で、戦地に残った、あるいは残された元軍人軍属の方に遭遇する機会を得た。

彼らに共通しているのは、「望郷の念」など微塵もない、あるいは微塵もお見せにならないことである。

今回、タイでは、お二人の「老兵」に出会ったが、日本からもっていった手土産などはかばんにしまったまま、最後まで出すことができなかった。

「文・写真」柳本通彦

## 指輪一つからの出発

お二人は、ともに現在タイ北部に住んでいるが、両者の人生が交差するとは一度もなかったのではないかと、お一人は、沖縄県国頭郡今帰仁出身の、伊波廣泰さん（大正9年生まれ）。

沖縄では「いは」であるが、ご本人は「いなみ」と名乗っている。

チェンマイから四時間ほどミャンマー国境に向けて車を走らせた田園の中に伊波邸はある。風邪気味だといって、客間のソファに座ったきりだったが、「若い頃はすいぶんもてましてね」とおっしゃるような洒落な方である。

出稼ぎに出ている両親に呼び出されて大阪に。小学校では、まったく言葉が聞き取れず、国語は駄目だったが、理科と図工は得意だった。

父が保証人倒れになって借金を背負ったことから、進学はあきらめ、鉄工所などで働いた。手先が器用で覚えがよく、雇い主には褒められたが、先輩からは妬まれたという。

太平洋戦争末期、技術職の軍属として宇品港から南洋へ。シンガポールに駐屯したのち、マレー半島を北上して

タイへ向かう途中に敗戦となる。兵隊では、腰痛に苦しんだ。たるんどるといつては、殴られ続けた。

大阪でも軍隊でも、苛められた記憶しかない。沖縄は全滅したときいた伊波さんは、男一匹何とかなるかと、部隊から逃走した。一方に腕に対する自信もあったが、沖縄人らしい国際感覚もあつたのではないかと、周りには移民で一旗あげた人間が大勢いたからだ。

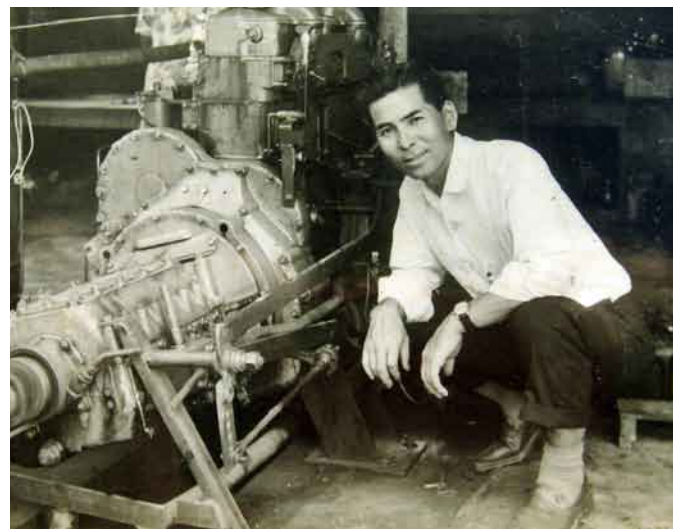
たまたま大阪で学んだ中国語と戦友から煙草と交換に手に入れた金の指輪が彼を生かした。彼は中国人に成りすまし、指輪を売って、当座の衣類を手に入れた。

逃亡兵には厳しい追及の手がのびていた。日本の憲兵にもつかまって、詰問されたことがある。日本語がわからないふりをし続けていると、その憲兵は「大和男児の誇りを忘れるな」といって残して、解放してくれた。

「芸は身を助く」の言葉通り、理科と図工での特技を生かして、伊波氏

はエンジンの修理などでカネをため、1956年に、イナミポンプ第一号を開発する。河川から水を取り込む農民の苦勞をみたからである。タイ初のステンレス製「INAMI PUMP」は大当たりをして、伊波さんは資産をなす。

彼はその成功の前に、華僑の娘を嫁にもらっていた。酒・煙草をやらず、品行方正、腕のたつ「中国人」として伊波さんの評判はよく、婿の口は引く



[上]イナミポンプ工場には最大25人の従業員がいたという。自慢の機械の前に座る半世紀前の伊波さん [右]妻子とともに暮らす現在の住まい [中央] 1975年、大阪の母親から届いた最後の手紙 [左下]伊波さんが老後を過ごすミャンマー国境に近い村

手あまただったという。結婚と前後して、偽中国人の化けの皮は剥がれたが、彼の評判に変わりはない。

## 沖縄人の心

彼は最後までタイ国籍をとらず、日本国籍を守り続けた。そのために事業には成功しても、財産を自分のものとするのができなかった。いまでも昔も裸一貫。でも人を欺いたり、出し抜い

たりするようにはなかった。みんなと仲良く生きてきた。それを彼は「沖縄人の心です」といつた。イナミポンプは、特許をとるところか、みなにその技術を教えたという。一人のウチナンチューとしての自信と慎ましさが漂う風貌だ。

戦後まもなく、大阪の両親とも連絡が取れた。しかし日本に帰ろうとは思わなかった。母親から届いた最後の手紙が現在の彼にとって彼の何よりの宝

物になっている。

「自分の好きな仕事を続けられて幸せだった」という言葉には、残留日本兵というイメージはない。四十歳以上年下という現在の奥さん、そして孫のよいうな子供にも恵まれて、美しい山里に元日本軍属・伊波廣泰は静かな老後を通している。

## 戦友の御霊を守って

もう一人の方は、長崎出身の藤田松吉さん（大正6年生まれ）。いわゆるインパール作戦の生き残り。脱走したのではない、部隊に遺棄されたのだと語る。

チェンマイ近郊の荒地を自ら切り拓いて建てた自宅は、高床式の木造建築

で、外からの階段をとんとんとあがって、すぐの板間に藤田さんは寝ていた。いや寝かされていた。行動はかなり不自由なようだが、話は何とか通じる。耳元で問いかけると、しばらくして反応が返ってくる感じだ。尿の臭いの染み込んだ万年床になんとか座ってもらっていたが、途中で疲れて寝てしまわれた。

藤田さんは中国戦線からインドシナに連れて来られて、部隊とはぐれた。そして故郷の家族にも捨てられ、ついに日本に帰ることがかなわなかったのだ。

日本の会社が請け負った道路工事に雇われ、こつこつ貯めた金で土地を手に入れた。生活に余裕ができたとき、彼が始めたのは、遺骨の収集だった。インパール作戦からの逃避行。日本兵の骨で白く染まったとも言われた街道に藤田さんは再び戻り、戦友の骨を探し続けた。

彼の畑の一角には、その遺骨を祀るための堂々たる慰霊碑がたつ。それは、日本なんか捨てられたって、俺はどっこい生きてきたんだぞという、藤田さんの面魂そのもののようにみえる。



[上]藤田さん宅には近隣在住の日本の方々が折々訪れてくださっている。藤田さんについては、以下の著作に元気な頃のインタビューが掲載されている。『帰還せず』青沼陽一郎著(2006 新潮社)、『望郷』三留理男著(1988 東京書籍) [右]彼が老後を過ごす自宅 [左]彼が戦友のためにたてた慰霊碑には「噫忠烈戦歿勇士の慰霊塔」と刻まれている